
龍が、こい願えば。

当真伊純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍が、こい願えば。

【Nコード】

N0205Z

【作者名】

当真伊純

【あらすじ】

一人の魔法使いが流罪となった。
一匹の龍がそれを拾った。

魔法使い―エルヴィーラの願いは故郷へと戻ること、そして自らを流罪に処した者たちへ復讐すること。
その願いを叶えるべく、エルヴィーラは龍に言った。
「私の言うことを聞きなさい、龍」と――。

2011年度コバルトノベル大賞落選作です。

流罪

「では、被告人を流罪に処する」

漆黒――裁判官だけに許されたその色の衣をまとう男の声が、張り詰めた法廷の空気を震わせる。それが石造りの高い天井にこだまし、跪いている女の耳に届いた。

そう、被告人は女だった。

魔法使いのローブに身を包んだ彼女は何も言わずに――否、何も言うことが出来ずにただその判決を真正面から受け止める。

長い時間、石の床に跪いていたため、すっかり足は凍えてしまっている。床だけではない。この裁判所の全ての面は石で出来ており、日光を取りいれる窓も少なければ、冷えた空気が身に染み入り、身じろぎをする度に節々がきしむ。

口は、ここに入ってきてから魔法によってふさがれたままだ。弁護をすることもされることも叶わず、ただ彼女の罪だけが読み上げられて今に至る。

手首には、密に文字が記された錠がかけてある。それは、重さ、そして魔法を封じるという点で、彼女を二重に戒めていた。

そう、これは裁判などではない。体のいい処分なのだ。

悔しさをこらえるために俯けば、風呂にも入れず汚れにまみれた黒髪が滑り落ちる。

だが、彼女の切れ長の双眸には全てを燃やしつくしそうな強い光が宿っていた。

諦めを受け入れた者には到底持ちえないその輝きが、この場に集まった全ての人間に向けられる。

彼女は音もなく語る。これから刑の執行までに精一杯抗ってやると。幸いにも彼女の味方は、この場にはいないものの皆無ではない。彼と協力して、なんとか糸口を見つければ。

その彼女の決意を一蹴するかのように、裁判所に黒いローブの一

団が入ってくる。

闇から紡ぎ出したような分厚い衣は、刑を執行するものだけが纏う、忌み嫌われるもの。ローブには口元まで隠れるような大きなフードがついており、どの顔も拝むことは敵わない。だが、彼らが一樣に手にしている杖だけは、緑の石をはめ込まれたもの、黒檀からなるものなど、それぞれの特徴を有していた。

黒いローブの者たちは、女を中心にして円を作ると、呪文を紡ぎ始める。

その言葉は、まごうこと無き移送の魔法を発現させるためのものだった。

流罪の執行は、期間を開けて行われるのが慣例。判決と同時に執行など、前代未聞だ。

しかし、それはこの場にいる誰もが思っているらしい。傍聴していた者たちからざわめきが聞こえる。その一方で裁判官たちは顔色一つ変えずに成り行きを見守っている。

彼らは許さないのだ。彼女の犯した罪を。彼女がここで息をしていることすら。

執行人達は、ただ呪文を紡ぐだけ。まるでこれが数百年も前から定められていることであるかのように、ためらいもなくただ粛々と行為を進めている。

外で、誰かが騒ぐ声がした。

それはよく聞き知った声で、彼が最後の抵抗をしてくれていることが分かった。

しかし、それは恐らく無駄になってしまう。

詠唱はついに最終節に入った。

女を中心として、魔法陣が光を帯びる。その文様の複雑さときたら、通常時に彼女が扱う魔法のそれを遙かにしのいでいる。

全てが、彼女を追いやるため、少しでも遠くに、もう二度とこの地を踏めないように用意されていたのだ。

悔しさに、女は唇を噛んだ。血が一筋、口の端からこぼれおちる。

「何か、言い残すことはあるか」

黒いフードの中の一人―顔も見えないが恐らく声からして男だろう―が問う。執行前に許された最後の言葉なのだと女は確信した。

ここに足を踏み入れてからの喉の閉塞感が、いつの間にか晴れている。最後の言葉を告げる為に、言葉を封じていた魔法が解除されていたのだ。

彼らは望んでいるのだ。みつともなくあかく咎人の醜態を。その断末魔を。

同時に、女は理解した。何を叫んでも、どうあがこうとも、この結果が覆らないことを。

ならば、せめてもの一撃を。

女は、最後の言葉を告げる。過去についてではなく、いずれ来る未来を見据えて。

「私はここに戻ってきます。必ず、どんな手を使っても」

女の黒く深い色をした瞳は、暗い輝きをもってフードの男を射抜く。

光がはじける。

疾風が巻き起こる。

こうして、流刑は執行された。

脅迫（前書き）

オスミルと出てきますが、特に例の話との関連はありません。

脅迫

風が、吹いている。

じりじりと肌に痛みを感じるのは、おそらく照りつける日差しが強さゆえだ。それはもはや暴力と言ってもいいほどに、女の白い肌を容赦なく焦がす。

打ち捨てられた体が衝撃から立ち直るには、もう少し時間がほしかった。

口を開くと、なにかざらざらとしたものが口に入り、せき込んでそれを吐き出す。

砂だ。

起き上がり、女がまず目にしたのは黄色と青のコントラストだ。

砂、砂、砂。見渡す限りに、その黄金色の粒子が広がっている。

そして、視界の残りを埋め尽くすのは雲ひとつない青空。たった二つの色が、途方もない絶望を持って女に襲いかかる。

随分遠くまで飛ばされたようだ。砂漠など、雪国生まれの彼女にとっては、本の中の存在でしかなかった。

しかし、彼女は戒めが無くなったものの、痛々しい枷の跡の残る手を支えに立ち上がる。

「戻らないと」

呟いたのはその一言だけだった。そして無謀にも、日よけの外套も持たず女は歩きだす。しかし、故郷の北国の服装がそれを阻む。更に砂漠を歩くに適さないブーツが彼女の歩みを更に鈍らせた。

「戻らないと」

うわ言のように、誰に聞かせるでもなく、彼女は再び呟く。

だが、その狂気にも似た願いは、暑さの前に屈してしまう。長期に渡る勾留によって、彼女の体力はとつくに尽き果てていたのだ。私は、戻らなくちゃ。

三度目は、ついに声にはならず、そのまま彼女の意識は途切れる。

最後に、彼女が瞼の奥の闇に描いたのは、遠い故郷の幻だった。

早く、早く、早く。

私は行かなければ。

あの国へ、その都へ、――へ。

冷たいものが額に触れる。火照った体にそれは心地よく、触れられたところから熱による不快感があつという間に引いていく。

次に、それは髪を撫でた。倒れ込んだ時にまとわりついた砂がこびりついていたはずなのに、そのざらついた感触はいつの間にか消え失せていく。

あれほど重かったはずの瞼が苦もなく開く。

そのまま勢いに任せて彼女は跳ね起きると、真っ先に自分がどこにいるのかを確認した。

土の壁、土の天井。窓は小さくとられている。暗さは、裁判所と同じほど。しかし、あの心まで凍えさせそうな冷たさはない。それは、自分の上に掛けられていた華やかな色の寝具のおかげかもしれない。

「起きたか」

傍らには一人の男。目に入ってきたのは、苛烈な炎にも似た色の髪と瞳だ。そして、北国育ちの彼女が目にしたことのない、不思議な衣をまとっている。頭に無造作にまかれたターバンに、ゆるく体の線を隠すローブのようなもの、そしてじゃらじゃらとついた装飾品の類、なにもかもが彼女の日常からはかけ離れている。

しかし、今の彼女にとってそれは瑣末なことではなかった。ベッドから降りるなり、履きなれたブーツに足を突っ込むと、出口を探しさまよい歩く。

建物は、素材だけではなく造りも彼女の故郷のものとは違っているため、出口を探すのには大分難儀してしまう。その間、うわ言のように彼女は繰り返す、

「帰らないと、早く。私は帰らないと」

「待て、そんな弱った体でどこへ行く」

男の武骨な手が女の腕を捕らえる。しかし、彼は突如として激しい抵抗にさらされた。

「離して！ 私は戻るのよ！」

先ほどまでベッドでうなされていたとは思えないほどの力を発揮し、女はやつと視界の端に捉えた出口に向かい、放たれた矢のように駆けだす。

彼女が思う地へ、まさに踏み出そうとしたその瞬間。

光とともに目の前に広がったのは、やはり黄金色と蒼穹の果てしなく続く対比だった。

「このガラドラシャ砂漠の真中からどこへ行こうと言うのだ」

背後から男は諭すように告げる。

しかし、男の声は彼女に届いていないのか、一步を躊躇いもなく踏み出す。今にも突風にあおられそうだと言うのに、その細い体をなぎ倒されまいと、傾けながら、一步、また一步と彼女は黄砂を踏みしめる。

それに呆氣に取られていたのもつかの間、男が女を制するために前に進み出る。

「無茶をするでない。貴様の体はぼろぼろだ。このままでは行き倒れてこの砂の一部になるのが関の山だ」

呆氣なく進路をふさがれてしまったことに不快感を示しつつも、女は男の横をすり抜け、更に歩み出す。

こんなところで立ち止まっている暇などない。たとえそれが無謀で馬鹿げたことでも彼女は戻らねばならなかった。

しかし、彼女の上に突如影が差す。遮るものはないはずの砂漠に現れたそれに、女は思わず歩みを止めてしまった。

「人間、あまり慈悲深い龍の前で哀れな真似をしてくれるな。我^{われ}の心が折れそうになる」

遙か頭上から降ってきたその声は、まるで鐘の音のように深く、高らかに響き渡る。熱風に晒されても遮られることなく、はつきり

と女の耳に届いた。

見上げれば、赤い瞳と視線が結ばれる。瞳だけではない。長く伸びた首、雄々しく広がる両翼、鋭く研ぎ澄まされた爪の生えそろう四肢、その全てを覆う鱗が鮮やかな紅だった。

大きく裂けた口からは真つ白の牙が覗き、影の中で妖しく閃く。圧倒的な質量と存在感に押しつぶされそうになる。漏れ出る唸り声は低く、まるで地の底から響くように、女の耳を震わせる。

女は悟った。彼が、誰であるかを。

「あなたは、龍、なの？」

遠い昔に消え失せたはずのその種族の名を、女は呼ぶ。

赤い瞳が少し細められる。笑ったのだろう。聞えてきた声はどこか誇らしげな調子だった。

「そうだ。我は誇り高き西の龍族の血統だ。どうだ、参ったか」

古の覇者。

願望の体現。

そう称されるものは、女に向かってまざまざとその威厳を見せつける。

彼の拳動は少ない。しかし、その一つ一つが重く、それでいて見る者の目を奪う優美さを持ち合わせていた。彼女は、口もきけず食い入るように姿を見つめる。

無理もない。この砂漠以上に、龍は彼女にとって絵空事のようなものだったからだ。

かつては人間と深く交わったとされる龍だが、近頃はめつきりその姿を見ることは敵わなくなった。

いつしか、人はその存在を物語の中の物と決めつけていた。見たことがないのは存在しないことと同様、そう思ってしまうのが人間の常だ。

その存在に向かって、女は恐る恐る問う。

「もちろん、龍なら元に戻るのよね。さっきみたいな人間の姿に」
「当たり前だ、我をなめるな。人間」

そう言うなり、堅固な鱗が見る見る間に人の肌へと変貌していく。その中でも、たてがみのようにそびえていた首の鱗の連なりは再び燃えるような赤毛へと代わり、服をまとった姿で、再び男は女の前に現れる。

彼女の上に作られていた大きな影は今や完全に消え失せてしまった。

しかし、今度は女が龍の上に影を作る番だった。見計らったかのように女は男に飛びかかり、勢いのまま馬乗りになる。暗く光る漆黒の瞳は龍を射抜いた。

「私の言うことを聞きなさい、龍」

低く、唸るような声は、明らかに男に姿を変えた龍を脅していた。しかし、龍は動じることなく女に向かって淡々と言葉を紡ぐ。

「拒否する。魔法使い、その力は何のためにあるのだ」

「どうして、私が魔法使いだって」

「濃い魔法の匂いだ。甘ったるくて、極上の菓子のような匂いをさせていて、魔法が使えないなど冗談だからな。どうだ？ 我の勘は正しいだろう？」

分かっているくせに、わざとらしく彼が尋ねてくるのがひどく気に障り、ぶつきらばうに「そうね、正解よ」と返す。

魔法大国オスミル。その王都であるシエジェランは、魔法で栄えた都市だ。町中の至るところでその恩恵は享受され、今や火を起こすにも馬車を引くにも魔法が欠かせないのだ。

彼女は選ばれた魔法使いとして王宮に詰めていた。魔法使いの多いオスミルでも、王宮付きとなればその栄誉は計り知れない。

もっとも、今となってはその栄誉も過去のものとなり下がってしまったが。

「私たち人間はあなた達と違ってそれほど大掛かりな魔法を使えないのよ。王都にいて加護を受けられればまだしも、こんな離れたところで私一人じゃ移動の魔法は無理よ。だからお願いしているのよ。分かる？」

「では、魔法使い。一つ反論を述べるが、これはお願いなどと言う生易しいものではなく、脅迫というものだ。我は思うのだが」

傲慢で、自分勝手な願いだと女自身は自覚していた。しかし、自覚した上でこうまでしななければいけない理由が彼女にはあった。

「私は、帰らなければいけないの」

彼女の心を占めるその想い、それを知ってか知らずか、龍は「ふむ」と思案するように沈黙してしまう。

願いを聞いてくれるか、そう喜びかけ、力を抜きかけたその瞬間、龍は自分の上に覆いかぶさる華奢な体をひっくり返し、今度は逆に女を砂の寢床に組み敷いてしまう。

自らの優位を獲得した龍は意地の悪い笑みを浮かべ、女に囁きかける。

「人間の、しかも小娘が我に力で勝てるとも思ったか」

なんとか暴れて脱出を試みるも、体躯の差、男女の差、そもそも種族の差の前には、抵抗など無意味に等しかった。

一通り暴れた後に、女は息を切らしながら怒りに満ちた瞳で自分を押さえつけている龍を睨みつける。悔しさのあまり、音が立ちそうなほどギリギリと歯を噛みしめながら。

「なぜそこまで故郷に戻ろうとする、魔法使い。見たところ、貴様はとてもではないがまともな扱いを受けていたとは思えない」

男の視線は、少しでも力を込めれば折れてしまいそうな腕に注がれていた。そこに生々しく残る手枷の跡が、更に痛々しさを感じさせる。

しかし、龍の憐憫に満ちた目が対峙したのは、強い意思を宿した漆黒の二つの光だった。

「冤罪をかけられたのよ。それを晴らさないと気が済まないの」

「冤罪とな。我はそれがどの様なものか、ひどく気になる」

「じゃあ、私を故郷まで運んでくれたらその冤罪の内容を教えてあげる」

わずかに見えた取引の活路に女は食いつくが、龍はそれをあつさ

りとかわす。

「ならばよい。貴様の心を覗くことなどわけないからな」

「卑怯者！」

いや、この場合卑怯龍と呼ぶべきか。

しかし覆いかぶさりながら男はくつくつとかみ殺すような笑いを浮かべる。

「嘘だ。我には貴様の心は読めない」

真剣に会話に向き合っていた女は、このような状況でからかわれたという事実、頬を染め歯噛みをせずにはいられない。

「卑怯な上に嘘つきなのね」

「ああ、まるで人間のようなだろう」

不意に男は女を拘束していた両手から力を抜く。そして丁寧なことに女を起こしてやると、その頭に日よけの為にと、自分の纏っていた上着を被せてやる。

影ができたことで、頭も冷え、思考も段々と鋭さを取り戻していく。先ほどまでは、まるで煮えたぎった鍋のように触れることすらかわないほど思考は暴走していた。

「あなたは龍なのよね」

「ああ、まごうことなき龍だ」

ようやく落ち着いた女が思い出したのは、一つの伝説だった。人々に、広く知られているその伝説の真偽を眼前の龍に問う。

「龍は、人の願いを叶えると聞いているわ。対価と引き換えに」

赤みを帯びた瞳が、先ほどよりも格段に鋭い光を宿す。その圧に押されまいと、女は逸らしたいのをぐつとこらえて視線を返す。

今となつては昔のこと。しかし、今でも語り継がれるその噂。

龍はあらゆる願いを叶える力を持つ。

人が何かを願い、対価を差し出した時、彼らは必ずやその願いを叶えるだろう。

「魔法使い、貴様は我に願うのか」

「ええ。私を、オスミルまで連れて行って。今すぐに」

一つの賭けだった。

先ほど龍はここがガラドラシャ砂漠だといった。彼女が頭の中に描いた地図では、この砂漠は故郷から気の遠くなるような距離があるはずだ。

ここで、彼を利用しなければ、一気に状況は苦しくなる。

いや、ただでさえ苦しい状況が、絶望的になる。

だから、女は願った。龍に。

「対価は」

龍の言葉はそれだけだった。しかし、それだけで女が欲した答えの全てを内包してしまっている。

はやる気持ちを押さえ、女は龍に再び問う。

「あなた、なにか刃物は持っているかしら」

すると龍は、腰の横に下げられている湾曲したナイフを差し出す。それを手に取り、革の鞘から抜き出すと、女は鋭く光る刃を髪に当て、力任せに切り取る。

腰ほどの長さだった髪が、肩口で揺れるほどの短さへと変わる。

余りの突飛な行動に、さすがの龍も呆気に取られたようだった。

口をあぐりと開けたまま、固まってしまっている。

しかし、幾筋もの黒い流れを女はなんの惜しげもなく龍に差し出す。

「ほら、龍は綺麗なものが好きなのでしょう。乙女の髪よ、黒曜石とまではいかないけれど」

龍は一通り驚ききったのか、今度は不敵な笑みを浮かべ女に問う。

「魔法使い、名は？」

「エルヴィーラ」

名前を聞いた龍は笑った。まるで、尊いものでも耳にしたかのように、溢れるような、喜びに満ちたその表情に、エルヴィーラは戸惑いを隠せない。

たかだか、ちっぽけな人間ごときの名前の何がそんなに嬉しいのか、エルヴィーラは疑問に思わずにはいられない。

彼らが惹かれるのは、人ではなく、その願いだけであるはずなのに。

「よかるう、魔法使いエルヴィーラ。貴様の願い、この龍が確かに聞き届けた」

そして、瞬く間に先ほどの鱗に包まれた真の姿に変わったかと思うと、エルヴィーラに背に乗れと促す。

恐る恐る、背中から突き出た両翼の間に掴まる。その鱗は見た目ほど固くはなく、むしろエルヴィーラが今まで触ったもののよりも心地よい。

「しっかりと掴まっっている」

そして羽を何度か大きく上下させると、ふわりと浮きあがり、上昇してしまう。

蒼穹が一気に近くなる。

「上昇気流に乗った。勢いに任せて飛ぶぞ！」

彼の言葉通り、先ほどまであれば視界を埋め尽くしていたはずの黄金色の広がりはずいぶん遠ざかり、今やエルヴィーラの前には龍の深紅の鱗と、それと真つ向から対立する空の青しか見えない。

上下の動きの次にエルヴィーラを襲ったのは、真正面から押し寄せる突風だった。

風と一体になり空を突っ切るリユーから振り落とされぬよう、エルヴィーラは更に強く彼の背にしがみつく。

風が、ざんばらになった髪をなびかせ、時折その強さに目を閉じてしまう。

しかし、それに負けじとエルヴィーラは浮かんだ疑問を龍に聞えるように大きな声でぶつける。

「あなた達龍は滅んだんじゃないの？」

「そう寂しいことを言ってくれるな、魔法使いよ。我々が滅びる時は、人間たちも一緒だ」

風の中でも龍の声はよく響いた。むしろ空気の振動など介さずにそれは届いているのかもしれない。

「そう言えば、あなたの名前を聞いていなかったわ。あなた、なんというの？」

「それはな」

声の調子がやけに神妙だったので、ついエルヴィーラも構える。少しの間、待たされた後、龍は答えた。

「秘密だ」

「ちよつと、もったいぶっていないで教えなさいよ！ 減るものでもあるまいし」

「それがな、減ってしまうのだ。魔法使いよ。我々龍は、真の名前ともう一つ大切なものを奪われると死んでしまう」

その大切なものが何なのかさすがに聞くのは躊躇われた。いくらなんでも、彼の生死を握るような真似はご免だ。

「じゃあ、あなたをなんて呼べばいいのかだけでも教えて。名前がないと不便だわ」

「とりあえず、リユーとでも呼んでくれ。今はそれで十分だ」
リユー。

告げられた名前を音にのせる。それは彼の鱗と同じようにエルヴィーラに馴染み、不思議なほど心地よい。

そして、名前を呼ばれたことで勢いを得たかのように龍は更に風の中で加速していった。

嗚咽

夕日と夜闇がせめぎ合う頃、ようやくエルヴィーラは地面との再会を果たした。

リユーが降ろしてくれた場所にたたずみ、彼女が真っ先に発した言葉は震えていた。

感動ではなく、主に怒りによって。

その理由はすぐに知れることとなる。

「ここはオスミルなのよね」

「ああ、まごうことなきオスミルだ」

「確かにオスミルだわ。ええ本当に。けれど」

看板に記されたのは、ドムダルフという擦れ気味の文字だ。

ここはオスミルの中でも王都から最も離れた辺境の地、隣国との国境付近に位置するドがつく田舎だ。

「私が行きたいのは王都だったのよ！ それをこんな所に降ろして、どういうつもり？」

「どういうつもりも、こういうつもりも、髪の毛くらいでは、ここまで飛ばすのがやっとである。我、悪くないし」

「そうならそうと言ってちょうだい！ あと、その小娘みたいな気に障る言葉遣い、やめて。私、あなたを今すぐ殴りたくて堪らないの」

「ふふん、そうだろう、小娘みたいであろう。人間の本で学んだのだ」

エルヴィーラの怒りなどどこ吹く風とばかりに、人を小馬鹿にくさった面持ちでリユーは言い放つ。彼の言葉が、態度が、全てが今のエルヴィーラの神経を逆なでする。

しかし、今となつては、怒りに費やす力すら惜しい。腹の中の煮えたぎるような感情の高ぶりを冷まし、前を見据える。

「まあいいわ。ぐだぐだ言っただけでも始まらないもの」

「まさか歩いて行くつもりか」

「そのまさかよ。時は金なり。一刻たりとも無駄にできないの。私は、早く帰らなければいけないのだから」

エルヴィーラの漆黒の瞳が捉えるのは今にも山の端に溶けてしまいそうな夕日だった。

既に東の方の空は闇に覆われていて、夜を迎えるのはそう遅くないと子どもでも分かる。そんな中、女が人気のない道を歩くなど、どう見ても無謀だ。

「今から歩くにしろ、顔が死人の如く真つ青だ。むしろ、もう墓に片足を突っ込んでいるように見受けられる」

「オスミルに帰るまでは死んでも死にきれないわ。墓から這いあがつてでも私は帰るわよ」

「帰らなくてはいけないからか」

何度か彼女が繰り返した言葉を、リユーはそのまま言葉にのせる。しかし、エルヴィーラの返事はない。

否、返事をする事ができなかったからだ。

汚れたローブをまとう華奢な体が、急に傾いでいく。地面が、近い。

何かを、リユーが言っていたような気がしたが、それを聞きとることもままならず、エルヴィーラの意識は泥のような疲れに飲み込まれたのだった。

『お前が、ここで暴れていると言う悪童か』

始まりは、その一言だった。自分がなんと返したかは覚えてはいないが、口汚く罵るか、まともなことを言わなかったことが原因で、彼が顔をしかめたことだけはよく覚えている。

貧民街で暴れている孤児がいる。我流の魔法を使って悪さをするため、手に負えない。

そんな住民の苦情を聞き届けて、王宮から派遣された男はそれを処理しに来たのだ。

捕獲には一日ほどかかっただろうか。いくら野生児のような暮らしぶりだったとはいえ、所詮は子どもの体力。大の大人の前では持久力の点で敵うはずがなかった。

『お前は筋がいい。まっとうに魔法を学んで、それを人のために役に立てなさい』

それは、孤児としてまるで野良犬のような生き方をしていたエルヴィーラの心に、ひどく染みる言葉だった。

彼とは、それきりだった。名前も、知らない。

『ほら、みるよ。あれが噂の野良犬だ。卑しさが顔に滲み出ているじゃないか』

学校に通い魔法を学ぶことは、今まであてもなく生きていたエルヴィーラにとって、まるで夢のような楽しい時間だった。しかし、それを妨げたのが、身分はあるが実力が伴わない同級生たちの悪口だった。

悔しくて、決して埋めることのできない出自の差の分まで取り戻すかのように、エルヴィーラは寝食も忘れて勉学に励んだ。

そうした努力の末に得たのは、誰にも理解してもらえない孤独と、支払った苦勞の対価にふさわしい王宮という職場だった。

そこで、エルヴィーラは一人の男に出会う。

『今日から、君と同じ職場で働くことになります。トルドです。よろしく、エルヴィーラ』

彼は同僚だ。こうなってしまう前は、毎日のように顔を突き合わせ、魔法について何度も語り合った。彼とは口を聞くことも敵わなくなっただけになるだろうか。

最後まで自分の無罪をただ一人訴えてくれた彼が、今どうしているかは分らない

二十年を過ごした王都の思い出など、こんなものだ。幾人か優しい人には出会えたが、何度も失望させられ、惨めな想いをした。なぜ、自分は戻ろうとしている。

何度自分に問いかけても、答えを得ることはできなかった。それ

でも、エルヴィーラは帰らなければいけないと思うのを止めることができなかった。

瞳を開いて真っ先に視界に飛び込んできたのは、古びた天井の木目だった。

そして、傍らから降ってくる声。

「ここは宿屋だ。ちなみに貴様の耳飾りを質に入れた。文句は聞かない。そして、貴様をここまで横抱きにして運んだが、少しばかり重いようにも思えたので減量をお勧めする」

なにか反応があるだろうかというリユーは身構えるが、それは返ってこなかった。エルヴィーラの底の見えない虚ろな瞳は、ただ宿屋の天井を映すばかりだ。

「わ、我は今冗談のつもりで言った。貴様は羽のように軽かった。本当だ。むしろもう少し肉をつけた方がいい。主に胸のあたりに」

そこでやっとエルヴィーラは反応を返す。といっても、リユーの顔が視界に入らないように背を向ける形で寝返りを打ったのだが。

しかし、その眉はしっかりとひそめられていて、先ほどの茫洋とした様に比べれば大分人間らしい、表情と呼べる表情だった。

「あなた、いつまで私の側にいる気なの」

「そうカリカリするでない、魔法使い。龍にとて情くらいはある」

「情で腹が膨れたらどんなにありがたいことでしょうね」

「その言い方はあまり可愛らしくはないぞ、魔法使い。そのようでは男が寄りつかない」

「余計なお世話よ。それに恋人どころか友達すらいないわ」

この龍に打ち解けられないように、エルヴィーラは貧民街を脱しても孤独を貫き通した。

理由など簡単だ。

貧民街でその日暮らしをしていたエルヴィーラには人を簡単に信用することなど、命を危険にさらすに等しかった。

染みついた野良犬根性がいつまで経っても消え去ることはないの

だ。夢の中で見た男の面影も、手を取り合うには至らなかった。

きつと、それはこれからも変わらない。そのはずだった。

しかし、すげなく扱われたことを意にも介さず、リユーはベッドのそばに置いてあった紙袋から、次々と購入したものを取り出す。

「水もある上に、林檎もある。そして、着替えも用意させた。その格好は少々苦しいように見受けられる」

「なんでそんなものを買ってくるの」

「人は病を得た時にこうすると、人間の書物で知った。お前にも家族はいるであろう。こうされたことはなかったのか」

「私は捨て子よ。ついでに言っと、生まれてこの方病気になったことなんてないわ」

今度こそ、部屋の空気が冷え込んでしまう。

「我は失言をした。申し訳ない」

「別に、構わないわ」

そのまま静寂が二人の間を満たす。ただ重苦しいだけのそれに耐えかねて、リユーは切羽詰まった調子で林檎を差し出す。

「り、林檎を食べるか。我がむく」

「私でもできるわ。貸してちょうだい」

「いいや、こう言う時は誰かがむかなければいけない。それは世界の真理だ。きつとそうに違いない」

そんな下らない真理があつてたまるかと思論しかけるが、リユーの手に制されて再びベッドに横になる。疲れていた体は正直で、それだけのことでひどく体が楽だ。

「ところであなた、林檎はむけるの」

「ふふん、年の功と言言葉があつてだな、つまりはそういうことだ」

そうして取り出したナイフと林檎を前に、鼻歌交じりにリユーは手を動かしていく。

しかし、仰向けになっているエルヴィーラの耳に届くのは、決して順調そうとはいえない音だった。その上、時折つかえるような

危うい動作が視界の端に入ってきては、エルヴィーラの肝を冷やさせる。

そして大分時間をかけた後に、彼女の前に差し出されたのは薄い林檎の切り身だった。

切り取られた皮の山を見やると、食べられる部分が無残にも切り落とされていたことがわかる。年の功は、どうやら林檎の前では通用しなかったらしい。

「あなたって、本当に」

しかし、誇らしげな龍を目の前にして批判の言葉は喉で留まる。その代わりに一つ切り身を手に取り、口に放り込んだ。

林檎の甘酸っぱさと酸味が口内に広がり、じんわりと染み入る。立て続けにもう一切れ、二切れと手に取れば、それらもすぐに胃の中へと消える。

「味はどうだ」

「おいしい」

すると、龍は一つ笑みをこぼす。それは何の変哲もないただの一人の男の微笑みで、先程まで空を自在に駆け回っていたあの龍が幻であったかのように思えた。

だが、これは現実だ。そして、エルヴィーラの陥っている苦境は何一つ変わっていない。

緩みかけた緊張感を再び意識し、エルヴィーラは寝台から降りようとする。

「出るわ、こんなところでのんびりなんてしてられない」

「魔法使い、そんなことを言っているとまた倒れる。我はそう予言できるぞ」

「それでも、私は行かなくちゃいけないの」

「何が、そこまで魔法使いを突き動かす。我はそれが不思議でたまらない」

「だから言ったでしょう。私は冤罪を晴らさない」と

しかし、リユーの赤い瞳は全てを見透かそうとするかのように決

して逸らされることはない。

「嘘をついてはいけない。魔法使いの瞳は、復讐だとか、恨みに燃えるものではない。むしろ、必死で見ていて痛々しくなる」

その憐れみに満ちた瞳がひどく気に触り、エルヴィーラは感情のままに声を荒げる。

「龍に、何がわかるのよ！ あなた達は私たちとは違う。自分の無力さに打ちひしがれたり、絶望したりなんてしないのでしょうか？」

「そうだな、我々に叶えられない願いなどない。それが我々の龍たるゆえんだからな」

正論を突きつけられ、頭に血が上ったエルヴィーラは怒りにまかせて片手を振り上げる。しかし、それがリユーに振り下ろされることはなかった。

代わりに、固く拳を作った手が、寝具の上で震える。

今までに、何度こんな風に強く拳を握っただろう。

魔法使いに打ち負かされた時、同窓生に蔑まれた時、そして、あの判決を突きつけられた時。いつもエルヴィーラはそうして溢れだしそうな感情をこらえた。誰にもぶつけることのできない衝動をため続けてきた。

しかし、今は違う。エルヴィーラの前には龍がいて、そしてひどく穏やかな声音で言う。

「人間の女の心は海だと言われているが、海にとて底はある。そんなに色々と貯め込むと、底が抜けてしまうぞ」

先に溢れたのは、言葉ではなく大粒の涙だった。一つ流れてしまえば、それは堰が切れてしまったように次々とこぼれおちる。

そして、悲鳴のような、叫びのような、ないまぜになった声をあげて、エルヴィーラは泣いた。

嗚咽だけが、部屋の中にこだまする。それはおそらく、ひどく耳障りであるはずなのに、リユーは黙ってそれを聞いている。彼が何も言わないのをいいことに、エルヴィーラは食べた林檎の水分も出し尽くしてしまいそうなほど、その雫を溢れさせた。

そして、嗚咽の合間にたどたく言葉を紡ぐ。

「怖い、本当は」

「何が、怖いのだ」

「全てが、何もかもが」

「だったら、止めてしまえばいい。魔法使いが全てを背負う必要などないのではないか」

「でも、帰らなくちゃいけないの」

「わかった、とにかく魔法使いは帰らなくてはいけないのだな」

どんなに叫んでも、言葉が支離滅裂でも、龍は側を離れない。そのことがエルヴィーラの心を驚くほどなだめてしまう。

「恐れることは、悪いことではない。我がついている。だから、恐ろしいのなら恐ろしいと言ってしまえばいい」

「あなたは、幻滅したりしない？ 私が、どんなに泣いても」

「それすらも我は愛しいと思う。その脆さも、弱さも、泣けぬ我々にとっては尊いものだ」

そうして、リユーは一筋こぼれた涙をぬぐう。違和感なくそれを受け入れ、エルヴィーラは胸の中に浮かび上がった言葉を告げる。

「ありがとう、リユー」

すんなりと、その言葉は口をついて出た。

「我は、その言葉を聞きたかった。とても、美しくて、耳に心地よい言葉だ」

そう言って、ひどく嬉しげにほほ笑むものだから、言った張本人であるエルヴィーラも自然と笑みがこぼれる。泣き笑いと言うにふさわしい、ごちゃまぜの表情は今のエルヴィーラの心の内にはぴったりだった。

確かに、苦境は変わっていない。だけれども、この龍が傍で笑っていてくれれば、なんとかできそうな気がしてくるのだ。

涙を乱暴に袖で拭い、再び寝台に横になる。

「もう寝るわ。明日に備えないと」

「そうだ、それがいい。そうするがいい」

そして、リユーはエルヴィーラが目覚めた時のように再び手を握った。それはひどく自然なことで、エルヴィーラは拒むことなくそれを受け入れ、瞳を閉じる。

「そう言えば、どうして私を助けてくれたの」

「声が聞えたのだ」

「私は叫んでなんかいなかったはずよ」

「心の叫びだ。我々にはない、強い願いが、私の心に届いた。我は、それに引かれて魔法使いに出会った」

龍は、エルヴィーラの望んだままの在り方をしていた。ただ、それだけで完璧で、誰の助けも必要としない。それなのに、彼は寄り添おうとする。こんな、不完全な人間を捕まえて、共にありたいと言っただ。

不可解だった。そして、温かった。エルの手を取ったのは、まぎれもなくぬくもりの通った手で、ひどく心を落ち着かせてくれる。

「おやすみ、魔法使い」

「おやすみなさい、リユー」

その言葉を言い終えるなり、エルヴィーラは嘘のようにあっさりと眠りの淵に引きずり込まれたのだった。

飛翔

翌日になると、エルヴィーラの体はすっかり元の活力を取り戻していた。

何かしたかとリユーに問うと、「さてな」と曖昧な返事を返される。なんとなくすつきりはしないまま、一人と一匹は目的地に向けて出発する手はずを整える。

魔法使いのローブは目立つので、リユーが用意した女物の服に着替える。そういえば、いつの間にかリユーも砂漠の民の纏うような服ではなく、この国で男たちが纏っているようなんの変哲もない服に着替えていた。

傍から見れば、どう見ても旅の途中の男女組みとしか思えないだろう。

しかし、嫌でもリユーは人目を引いてしまう。先ほどから、二人とすれ違うたびに振り返る女性の多さにエルヴィーラは驚きを覚えていた。砂漠の民のゆったりとした服装もよく似合っていたが、これもまた彼の華やかな容貌を引き立てている。人外の美しさの前では、地味な服ですら彼の引き立て役になるようだった。

一応エルヴィーラは咎人だ。ド田舎とはいえ、自分の罪を知る者と出くわすのではないかと思うと、心穏やかとは言えない。

そんなエルヴィーラの心の内を知ってか知らずか、呑気にリユーは問う。

「ところで魔法使い。王都に着いた後はどうするつもりだ」

「とりあえず、協力してくれそうな人に連絡を取るわ。杖も取り戻さないといけないし。処分されてないといいのだけど……」

杖は、魔法使いにとっては半身のような存在だ。各魔法使いのためにそれぞれ誂えられるそれは、持ち主の力を存分に発揮してくれる。ゆえに、今の杖を持たないエルヴィーラは魔法使いとして半人前であるとも言える。

しかし、それよりもリユーは別な部分が気になるようだった。

「力を貸してくれる人間などいるのか」

「職場の同僚よ。最後まで冤罪だって訴え続けていてくれたけど」

「ふうん。そんなことをして、その男まで立場が悪くならないのか」
急に、リユーの口ぶりが面白くなさそうな、不満そうなものになる。

「なんで男だと決めつけるのよ」

「では、男ではないのか」

リユーの質問に答えることに罪悪感を覚えている。なぜ、ここまでのこの龍に説明することをためらってしまうのか。

「……男よ。でも、彼は王族の一人だからこれくらいで立場が悪くなったりしないわ」

思えば、どうしてあそこまで彼がエルヴィーラに親切にしてくれたのかも、今となっては謎だった。

「なるほど、身分違いの恋というものか」

「なにが？」

「その男と魔法使いがだ」

エルヴィーラにとって、それは余りにも突飛な決めつけで、反論もしどろもどろになる。

「私とトルドはそんなんじゃない」

「トルドと言うのか、その男は」

なんとか説明をしようとも、リユーの機嫌は悪くなっていく一方だ。しまいには、いじけるような、拗ねた声でぼそりと呟く。

「そうか、我よりもその男は頼りになるのか」

「ああもう、本当にあなたは面倒ね！」

「我と共にいるにも関わらず、他の男の名前を出されては面白くないに決まっている」

先に言い出したのはあなたの方じゃない。

そう言いかけるが、不意にリユーの瞳が剣呑な光を宿す。

「な、何よ……」

しかし、リユーが視線をそらす。

二人の真ん前―リユーの視線が注がれる先を、エルヴィーラも何事かと見やる。

「こんなところにいらつしやったのですか、百年程探しましたよ」

二人の前に、一人の女が立ちはだかる。プラチナブロンドの髪をなびかせ、リユーとはまた方向性の違った、涼しげな美貌だ。女は、両手を腰にやり、リユーに緑の瞳のきつい一瞥をくれている。

対するリユーといえば彼女の剣幕など堪えた風もなく、エルヴィーラに「古い知り合いだ」と告げて呑気に挨拶をかわす。

「シエラではないか。なぜここにいる」

「貴方のいらつしやる所であれば、どこであろうと馳せ参じます」
そうして、シエラはリユーの前に片膝を折る。その仰々しいまでの傳き方に、エルヴィーラはこの時やつと知ることとなる。彼が実は龍の中でも高貴な身分にあるのだと。

気だるげに前髪をかきあげ、リユーは深くため息をつく。

「我は今、貴様に構っている暇などない。下がれ」

エルヴィーラが初めて聞く、リユーの龍らしい不遜な声音だった。そのこともまた、彼がシエラに跪かれるだけの価値を持っているのだとまざまざと見せつける。

リユーはエルヴィーラの前では無邪気に振舞い、時には彼女を呆れさせる。こんな表情もできるというのに。

それを、シエラに見せてエルヴィーラに見せてくれないという事実が胸に引っかかる。

わずかな痛みを与えるそれはまるでとげのようだった。

しかし、その感情に名前をつけることはしない。エルヴィーラには果たさなければいけない使命があり、こんなところで足止めを食っている場合ではないからだ。

「一緒に行つてあげればいいじゃない。私一人でも王都に帰れるわ。それに、もう対価にできるようなものもないし」

この場にいる最も多くの者が幸せになれる選択肢を素早く選び取

り、リユーにはつきりと突きつける。

そうだ、そもそもこれ以上対価にできそうなものも持たないエルヴィーラとリユーが、同行する必要はない。

なんの躊躇いもなく言つてのけた同行者に、リユーはまるで仮面をすげ換えたかのようにふくれっ面をさらす。もはやそこに、威厳に満ちた龍の面影はない。

「いーやーだー。我は貴様を最後まで見届けたいのだ。我は龍だ。

我の願ひ事は必ず成就する。そう決まっている」

「あなた、言っていることは大それているけれど、要は子どもの我儘と一緒よ」

「そうだ、我はまだ子どもだ。まだ千年程しか生きていない」

千年も生きた子どもがいてたまるかと思れ、これ以上は付き合ひきれずにエルヴィーラが踵を返すが、リユーがそれを阻む。いきなり彼女を抱え上げ、まるで悪戯を企む子どものように口元を歪めながら、リユーは言う。

「逃げるぞ、魔法使いよ」

視界が反転し混乱しているエルヴィーラに、彼は断る暇など与えてもくれない。

しかし、そうしてリユーが駆けだすよりも、シエラがエルヴィーラの足首をしっかりと掴む方が格段に速かった。

「逃げてても無駄です。私と力比べなど、どちらが勝つか分かっておいででしょう」

「我が勝つに決まっている」

「そうです。あなたが勝てば、この方の体が千切れますよ。人間の体は脆い、我々とは比べ物にならないほどに」

その言葉は偽りではなかった。逃げるリユーと引き留めるシエラの間で、エルヴィーラの悲痛な悲鳴が上がる。

「痛い、痛い、痛い！ 脚が！ 千切れる！」

明らかに、人間のそれではないと分かるほどの強さで、シエラはエルヴィーラの足を握りしめてくる。

その叫びを聞いてしまえば、リユーも足を止めざるを得ない。

「やめろ、シエラ。魔法使いを盾にするなど、誇り高い龍族のすることではないぞ」

「では、誇り高い龍族であるのなら、どうしてあなたは我々の元へ戻らず、のらりくらりと逃げ回ってばかりいるのです」

揚げ足を取られて狼狽したのも束の間、やけに堂々とした態度でリユーは告げる。

「この娘が、我に願った。故に、我はこの娘と共にある」

エルヴィーラをだしにした、分かりやすい言い訳だった。

しかし、龍と願いの切っても切れない関係の前には、さすがにシエラも黙らざるをえないようだった。いや、龍だからこそ、黙らざるをえないと言った方が正しい。

エルヴィーラの足首をつかむ力がわずかに緩められる。しかし、まだ油断はならないので、完全に放すことはしない。

「わかりました。つまり、その方を送り届ければ、あなたは龍郷界^{じゅうきょうかい}へお帰りになってくださるのですね」

「検討しないこともないとは言いつてもいい」

こいつ、バツクレる気満々だね。

昨日今日で散々目の当たりにしたリユーのいい加減さは疑う余地もなかった。百年ぶりの再会を喜んでいるシエラには悪いが、もう百年この龍は行方をくらますだろう。それはエルヴィーラの確信にも似た予測だった。

しかし、疑うことを知らないのか、シエラは彼の言葉を信じ、掴んだ足首をやつと放す。

「ならば、私も同行いたします。今、貴方を取り逃がしたら、向こう百年は見つけられないでしょうから」

これ以上の譲歩はしないとシエラの声は物語っている。こうなってしまうとリユーもさすがに我儘を押し通すことに面倒を感じたのか「勝手にするがよい」とだけ言い捨てて、エルヴィーラに先を促すのだった。

その日は、ほぼ徒歩での移動だった。路銀があれば馬車を使えるのだが、それは最後の手段として残しておきたい。それがエルヴィーラの意見だった。

一晩十分に休みをとったエルヴィーラは、龍である二匹に引けをとらない十分な健脚を発揮した。休みも食事時だけという強行軍だったが弱音一つ吐かずになしてみせる。

そうして十分に日が暮れた頃、一人と二匹は野営をし、草を枕に眠りに就く。雪国であるオスミルでも、夏は外で夜を越せる。

決して楽とは言い難い、むしろ、いつ音を上げてもおかしくはない旅路だった。しかし、確実に王都に近づいている。その実感さえあれば、いくらでも我慢などできる。

王都の面影を胸に、エルヴィーラは夢も見ずに眠った。

いやに冷たい風が頬を撫ぜるのを感じ取り、エルヴィーラは意識を覚醒させた。野宿ではあったが、今日はそこまで風は強くなかったはずなのに。

体を横たえていたはずの地面が妙に固い。その上、土にはありえないほどのぬくもりを宿している。

「ここは」

そうして体を起こし、あたりを見回す。生い茂る木々は消え失せ、夜闇だけが視界に広がっていた。そして、自分が身を置いているのは、緑豊かな地面などではない。

銀色に輝く一面の鱗だ。

色は違えども、エルヴィーラはそのきらめきを知っていた。

「暴れないでください。落ちてしまいます」

理知的な声は、人の形をしているときと変わらず透き通っている。

「シエラ、よね？」

「今、貴女を王都まで運んでいる最中です。もう少しで到着いたしますので」

余りにも唐突なその言葉に、エルヴィーラは耳を疑った。しかし、思いがけず果たされそうな願いに、胸の鼓動が大きく跳ねる。

だがその一方で、脳裏にちらつく影がある。

「リユーは」

おそらく、彼はこのことを知らない。知っていたなら、引きとめたはずだ。自分も共にあると。

「貴女は王都まで行きたかった。ならば、もうあの方は必要ないでしょう」

「でも、私はリユーにお礼を言いたかった」

きっかけこそ脅しのようなものだったが、彼は愉快的同行者であったのは確かだ。この決して平和とはいえない旅路に、彼はゆとりをもたらししてくれた。

せめて挨拶くらいはしたかったが、シエラの答えはひどく冷たいものだ。た。

「礼も何も、我々龍は、対価と引き換えに願いを叶えます。そのようなものなど、端から不要ではありませんか」

リユーとは余りにも違う価値観に、エルヴィーラは戸惑いを隠せない。しかし、彼女の言っていることは正しい。今日出会った時から変わらず、いい加減なリユーのように芯がぶれることは決してない。おそらく、これが真に龍があるべき規範の姿なのだ。

それでも、あのいい加減な龍がここにいないことに、エルヴィーラは不満を覚えていた。

「でも、リユーはありがとうと言ったら喜んでくれた。嬉しいと言ってくれた」

龍の姿では、ため息をつくことは敵わない。しかし、人の姿を取っていたならば、確実に彼女はため息をついていた。そう思わせる口ぶりで彼女はばやくように呟く。

「私にはあの方が人間という存在やその作法にこだわることが理解できない。どうして、こんなにも脆弱で愚かな生き物に」

昼間の、あの力比べからでもそれは明らかだ。彼らが本気を出せ

ば、おそらく呆気なくエルヴィーラはちぎられたり、潰されたり、あるいは魔力の前にひれ伏すことになる。

しかし、彼らはそれをしない。少なくとも、リユーだけはそうしない。そう確信できる自信がエルヴィーラの中には満ち溢れていた。「愚かで、弱いから、リユーは人を忘れられないのだと言った」

「それくらい、私にもわかります。私とて龍なのだから。所詮、龍の性に抗うことなどできない」

「違うわよ、龍だからとか龍じゃないからとかじゃなくて、生きているものは他のものに興味を持たずにはいられないのよ。私も、そのことを忘れかけていたけど、リユーはそれをもう一度教えてくれた」

弱くても、強くても、それは生きとし生けるものの全てが持つ願いだ。誰かとつながっていたい、側にいたい。リユーが繋いでくれた手が、封じ込めてしまっていたエルヴィーラの本能を呼び起こしてくれた。

ちらりと、シエラが首をめぐるせエルヴィーラの方を見やる。その緑の透き通るような瞳はしばらくエルヴィーラを映した後に、また前方に向けられた。

「貴女は、私のよく知る方に似ていらっしゃる。一途で、一度言いだしたら聞かない」

「誰なの？」

「あの方の妹君です」

リユーの妹。ならば、彼女も龍なのだろう。龍に似ていると評されたことに驚きを隠せなくて、言葉を失いただ黙るしかない。

「どうして、あの方が龍郷界から出奔したか、ご存じではないのですか」

「いいえ」

「あの方は、妹君を探されているのですよ。人の所を訪れたまま、行方が分からなくなってしまった唯一の妹君を」

彼の放浪の理由を知り、エルヴィーラは動揺する。彼が、そんな

そぶりを見せたことは一度もないからだ。

「行方が分からないってどういうことなの」

「それは私たちが聞きたいくらいです。ただ、我々はそれ以来、人との交流を避けてきた」

「あなたたちは消えたのではなくて、人から身を隠していただけだったのね……」

「ええ。もっともあの方の前では龍の一族の中で定められたことも無意味のようですが」

そう吐き捨てるように言っても、彼女は長い間リユーを探していたのだ。

積み上げたもの、つながるものを見せつけられたような気がして、エルヴィーラはそれ以上何も言えなくなる。

そして、彼女の言葉に一つの疑惑というひっかかりを感じ、それを晴らしてしまいたくて口が何度か躊躇いがちに空回る。

だが、それを口にしてしまう前に、時は着てしまった。

「あれが王都ですね」

シエラが長い爪で指差した先には、まだ何も見えない。おそらく、龍の目は人間よりもはるか遠くを見渡すことができるのだろう。

「私は、あなたに対価を渡すべきよね？」

やっと、光が見えてくる。夜でもなお煌々とした光を失わない姿は、まごうこと無きエルヴィーラの故郷だった。

オスミルの王都にして魔法都市・シエジュラン。シエラは、その光に向かって急降下を始める。エルヴィーラは振り落とされないように銀の鱗の生えそった背にしがみつき、ついに地面が見て取れるほどの距離にまで近づく。そこには一人の男がいた。

「対価は、もう既に頂いております。あそこにいらっしゃる方に」
信じられない。そう思うしかないエルヴィーラは、言葉もなくしてただ食い入るように地上の影を見つめる。
トルドだった。

穏やかで、見る者を安堵させる整った顔立ち、闇の中でも輝いて見

える金の髪。見間違はずもない。

「言ったでしょう。私とて所詮龍なのです。人の願いに惹かれずにはいられない定めにある」

彼もまた、エルヴィーラと同様のことを試みたのだ。そして、成功したから今ここにエルヴィーラはいる。

最早こうしてシエラの背に掴まっている時間が惜しかった。衝動のままに龍の背から飛び下り、足のしびれにも構わず男に駆け寄る。「トルド！」

「エル、本当にエルだね？ ああ、かわいそうに。髪がこんなになつてしまつて」

「そうよ、トルド。龍に願つて帰つてきたの。髪なんて大丈夫。また伸びてくるわ」

目の前に佇むその姿はひどく懐かしく、エルヴィーラは安堵のため息をつかずにはいられない。

「彼は私に願いました。あなたにもう一度会いたいと。その願い、確かに叶えました。では、これで」

そうしてシエラは再び夜空の暗闇に向かって飛び立ち、やがて姿も見えなくなる。

残された二人は、互いを確かめ合うように見つめ合った。

あんなことになる前は、毎日のように顔を突き合わせていた。だが、波乱が続いた今となつては、その顔を見るのがまるで百年ぶりであるかのようにエルヴィーラには思われた。

それは、トルドにとつても同様らしい。勢いに任せてエルヴィーラを腕の中に捕らえた後、きつく、きつくその体を抱きしめる。

「君がいなくてさびしかった。でも、もう大丈夫だよ。君のことは僕が守るから」

その思いがけない力強さ、そもそも抱擁したことに対して、エルヴィーラは動揺を隠しきれない。そして、気になることもいくつかあり、エルヴィーラは素直に喜べないのだ。

「あなた、龍を呼び出したの？」

「そうだよ、王家にはまだその方法が残っていたんだ。問題は、魔法陣をどう手に入れるかだったけど」

そしてトルドが意味深な笑みを浮かべれば、彼が何かを危険を冒したことは明白だった。

彼は王族の一族に連なり、魔法使いとしての能力も高く、王の信用も厚かった。しかし、龍と交流する方法は門外不出として厳重に封じられていたはずだ。

「ありがとう、でも危険だったんでしょ？」

「君のためなら、どんな危険だって冒すよ」

戸惑うエルヴィーラに、トルドは更に動揺させる言葉を告げる。

笑みを浮かべたまま。

「さあ、そうしたら一刻も早くここから逃げよう。あれが、目覚めてしまう」

それは、何も知らない者に説明するには足り過ぎず、けれどもエルヴィーラに告げるには十分すぎる言葉だった。

嘘、とエルヴィーラはつぶやいた。

しかし、にわかに恐怖で体が震えだしたエルヴィーラを前にしても、トルドの笑みは変わらない。むしろ深まったようにも見える。

「嘘じゃない。もう王都は駄目になる。あれを止めることは、もう無理なんだ。王族も避難を始めているし、城は空っぽだよ」

トルドの横をすり抜けて、エルヴィーラは駆けだそうとする。彼女の眼中には、もはや自分をここに連れ戻してくれた男などなく、ただ城だけが映っていた。

しかし、男の手がそれを許さない。

「どこに行くの」

「城に決まっているでしょう。あれを止めに行くのよ」

一つ、トルドはため息をつく。そして、聞き分けのない子どもを前にした大人のように、努めて穏やかに語りかける。

「無駄だよ、エルヴィーラ。王族でさえ匙を投げたんだ。もってあと一日、それですべてが終わる」

「だから行くのよ。すべてを終わらせるわけにはいかないの」

そうして、自分を捕らえる腕を振り切ろうとするが、思いがけないほどの力強さで、トルドはエルヴィーラを拘束する。

「どうして、僕の言うことがきけないの」

口付けすら出来そうなほどに顔を近づけ、トルドは悲しげに眉根を寄せて言った。悲哀に満ちたはずのその表情が、ひどく恐ろしくてエルヴィーラは負けまいと睨みつけながら言い放つ。

「放して」

「駄目だよ、いくら君の願いでもそれは聞けない。さあ、僕と一緒に逃げよう。そうしたら、すぐにでも式を挙げよう。君は公爵夫人になって」

「何を、言っているの」

「ああ、そうだ。そう言えば結婚の申し込みもまだだったね」

急に、何を言い出すの。

そう笑い飛ばすこともままならないほど、今のエルヴィーラは混乱していた。しかし、そんなことは知ったことではないトルドは、更に暴走を始める。

跪き、エルヴィーラの手をとった彼は、躊躇いもなく言葉を紡ぎ出す。

「エルヴィーラ、僕と結婚しよう。必ず幸せにするから」

きつと、この申し出はこんなことになる前だったら喜ばしいことだっただろう。

だが、今となつてはエルヴィーラにただ呆れしかもたらさない。

王都の危機を前にして、この男は一体何を言い出すのか。

ひどく悲しかった。

エルヴィーラが守りたかったものの、龍に願つてまで帰ってきた王都を、彼はどうでもいいと言ったのだ。

この騒動が済んでも、きつとエルヴィーラは彼を受け入れることはできない。おそらく、これから一生。

迷うことなどなかった。その言葉はエルヴィーラの口から淀みな

く紡がれる。

「お断りします。私は、あなたと添い遂げることはできない」

一瞬、言葉を解することができなかったのか、トルドは何度か瞼をしばたかせ、口元を引きつらせた。

「もう一度、言って。僕は、少し耳が悪くなったようだから」

「断ると言ったのよ。同じことを何度も言わせないで。わかったの。私には、あなたよりも王都の方が大切なの。それじゃあ」

膝をついたまま呆気にとられているトルドをそのままに、エルヴィーラは駆けだす。

しかし、膝から力が抜けてしまう。それはいつそ不自然な程で、明らかになんらかの干渉があったことが途切れゆく意識の中でもわかった。

その干渉が誰なのかも、エルヴィーラには考えるもなく理解できてしまう。

最後に見たトルドの顔は、ひどく悲しげな、それでいて何かをいとおしむような、歪な笑みをたたえていた。

炎上

早く、私は行かないと。

早く、あの子を助けないと。

早く、早く、お願いだから。

目を覚ましたエルヴィーラは、まず自分がどこにいるのかを確認しようと身を起こそうとする。しかし、体は言うことを聞かず、指一つ動かすことはできない。

「目が、醒めたかい？」

声の主は誰何する必要もない。トルドだ。しかし、その声の調子はひどく冷えていて、エルヴィーラがかつて信頼を寄せていた男のものとはとても思えなかった。

どうやら、自分はベッドに寝かされているようだった。寝返りも打てないので、視界に入ってくるのは分厚い天蓋だけだ。

「うちの屋敷だよ。家族はもう王都の外にいるから、ここにいるのは僕と君の二人だけだ。魔法は確かに効いたはずだったんだけど、案外解けるのが早かったね」

放して、そう口を動かそうとしても、音にならずに虚しく唇がから回る。

「ああ、そう言えば叫ばれると困ると思って、声も封じていたんだった」

ずっと、トルドの細い指がエルヴィーラの唇をなぞる。すると先ほどまでどれだけ力を込めても発することができなかった言葉達ができるすると口を突いて出た。

「トルド、一体なんのつもりなの。放してちょうだい」

「君がいけないんだ、僕の許可も無しに僕の元を離れるから。君は僕のものなのだから」

そんなもの知らない。

彼はただ、笑ってエルヴィーラの側にいただけだ。なんの言葉も

無しに。

「私が、何をしたっていうの」

「何も言わなかったじゃないか。嫌とも言っていない。それはつまり僕のことを好きってことだろう？」

「ふざけないで！ 私は別にあなたのことなんて」

「そうやってつれない態度をとっても無駄だよ。僕はもう全部知っているんだ」

吐き気を催しそうな程に、彼の言葉の一つ一つがエルヴィーラに嫌悪感を与える。もう、トルドは彼女のよく知る同僚などではない。逃げないと。

身の安全、そしてこの王都で起ろうとしていることを思えば、それはエルヴィーラを突き動かすに十分な動機だった。

なんとか拘束を解こうと、魔法を思い出す。彼が得意とする系統の魔法と、それを打ち消すための文言も。しかし、トルドは簡単に見透かしてしまう。

「魔法はダメだよ」

そう言って、彼はベッドのそばのテーブルの上から何かを取る。

グラスに入ったその液体は、透き通る真紅だ。

「大丈夫、痛くないよ。先に薬を飲もう。抵抗すると苦しいから素直に飲んだ方がいいよ。さあ、口を開けて」

誰が口を開けるものか。その一心でエルヴィーラは顔を背ける。

すると、トルドは焦れたように自らの口に薬を含み、それをエルヴィーラの口に流し込むために口づける。

やめてと叫ぶ前に、それは呆気なく流し込まれてしまった。

自分の身にこれから何が起るかも分からず、エルヴィーラの心は恐怖に支配される。

そんな心の内を知らないトルドは、横たわる女の頬を撫でながら甘く囁く。

「怖がらないで、すぐにきつと僕の言うことを聞きたくなるから。でも、そうやってつれないふりをするのは、僕の気を引きたいから

だよ。君は罪深いよ」

段々と思考が混濁していく。しかし五感のはっきりとしていて、そのことが更に恐怖を煽る。

助けて。

エルヴィーラは呼ぶ。

彼を。エルヴィーラをすくい上げた、その温かな手を。

ここに、来て。

「ここにいたのか」

その声は唐突に部屋に響き渡った。部屋の主であるトルドはそれに狼狽し、声の方向に素早く体を向ける。

入口に佇むのは、赤い髪と瞳の、美貌の男。

「薬で女を落とそうとするのは、下種の作法。そうは思わないか」
口元は釣り上がっている。しかし、その赤い瞳は笑ってなどいなかった。

「人間、あまり我を怒らせてくれるな。それは我と願いを交わし合った者。貴様の様な三下が軽々しく触れていいものではないのだ」

「お前は、誰だ」

「龍だ」

エルヴィーラは背筋に冷たいものが走るのを感じる。

恐怖だ。

リユーは今怒りに煽られている。炎の色の瞳が、爛々と輝き、今にも全てを燃やしつくしそうな熱さでトルドを捉える。

そして、龍が何かを呟くと、トルドの体がいきなり横風ぎにされる。したたかに壁に体を打ちつけた男は、衝撃に怯んでしまう。

その隙にエルヴィーラに歩み寄ったリユーは、彼女のみぞおちに手を当てると、「浄」とだけ呟いた。すると、驚くほど意識が明瞭となり、体も自由を得る。

「薬を盛られたのか、貴様には魔法使いの、いや、人間としての矜持もないのか」

見下すような視線に耐えかねて、身を起こしかけていたトルドは

激昂する。

「黙れ、黙れ、黙れ！」

「黙るのは貴様の方だ」

そしてリユーがずっと手を地面に水平に切ると、トルドの口はまるで縫い付けられてしまったかのように固く閉じられてしまう。

「次は息の根を止めてやろうか。それとも、生きながらに心の臓を抉り出した方がいいか？ 選べ、今すぐにだ！」

「リユー、もういいわ。やめてちょうだい」

「貴様はこの男に手籠めにされかけた」

「そうね。だからこそ、やめてほしいと言っているの。拘束も解いて」

エルヴィーラは、静かに、足音も立てずにトルドに歩み寄る。彼女がこちらへ来てくれた、そのことにトルドは喜びの色を浮かべかけるが、女が浮かべるのはあくまで冷やかな表情だ。

エルヴィーラの拳がトルドを一閃する。予想もしない衝撃に、男の体は後ろへと傾ぎ、それに馬乗りになりながらエルは何度かその頬に拳を叩きこむ。

「あなたなど、魔法を使うに値しないわ。あなたのような卑怯者は、そうやって這いつくばって、惨めに見捨てられればいいのよ」

吐き捨てるような言葉を残して、エルヴィーラは部屋から駆け出す。その背中からはや振り返ることなどなく、リユーもそれに続くのだった。

走って、走って、エルヴィーラは走った。

留まってしまえば、際限なくトルドにされた行為が蘇ってきそうだった。

しかし、やがて走ることにすらままなくなるほど息が切れてしまう。それと同時に嗚咽が漏れた。

苦しい。

息の根が止まってしまいそうだった。

いつそ、そうなつてしまえばいいのにと思わずにはいられないほど、エルヴィーラの中には抱えきれない感情が溢れかえっていた。リユーはずっとエルヴィーラの後ろについている。しかし、決して彼女を追い越すようなことはしない。

だから、エルヴィーラは安心して泣き叫ぶことができた。

彼の目の前で泣くのは二度目だった。しかし、今度は泣いても、泣いても、少しも心に凝った淀みが晴れてくれない。

「ずっと、二人で組んできたの。駆け出しの頃から、陛下の側に寄ることを許されるようになってからも、ずっと」

こんな時に限って思い浮かんでくるのは、優しい彼の思い出ばかりだ。さっきの彼は幻でさえあれば。そう願わずにはいられない。

「私が気付いてさえいれば、こんなことは起こらなかった」

全てが、今となつては無意味な後悔だった。

「もう、消えてしまいたい」

「消えるなど、悲しいことを言うな。魔法使いよ」

そうして、リユーは恐る恐るエルヴィーラに腕を回す。まるで、壊れ物を扱うかのように、そっと。

しかし、一度触れ合つてしまえば、エルヴィーラの方から力を込める。加減など出来ず、それでもリユーは黙って彼女を受け入れる。

「我は、魔法使いがシエラに連れ去られたと知った時狼狽した。あれだけ必死になったのは久方ぶりだった。だから、もう我の前から消えることは許さぬ」

「あなたは本当にろくでなしね。卑怯者で嘘つきで、その上自分勝手だなんて」

「だから我は龍なのだ」

しかし、その龍がいるからこそ、エルヴィーラはくず折れずに済んだ。

涙を力任せにぬぐい、自らが目指す方向―城を見据えて彼女は静かに告げる。

「私は行かなくちゃ。城に」

瞳に、最早先ほどの不安げな色はない。
あるのは、ただ果たさなければいけない願いを胸に秘めた、意思の強い眼差しだった。

エルヴィーラに殴られ倒れてしまった姿勢のまま、トルドは壊れた人形のように虚ろに天井を仰いでいた。

しかし、突如としてその瞳に狂気に濡れた光が宿る。

「嘘だ。嘘だ、嘘だ、嘘だ。エルヴィーラが僕を裏切るなんて」

声は力ない。しかし低く呟くようなそれが引き金となり、トルドはすつくと立ち上がる。

「違う。僕は間違っていない。間違っているのはエルヴィーラの方だ。間違っているものは悪いものだ。悪いものは排除しないと」

部屋の中に置いてあった杖を取ると、トルドは駆けだす。

「僕は、願いをかなえるよ」

その言葉の余韻を、部屋に残して。

トルドの言葉通り城は、すっかりもぬけの殻だった。兵士も、召使も、もちろん主である王も、誰もそこにはいない。

エルヴィーラとリユーはひたすら静寂の中を駆けた。一人と一匹の間には言葉などかわされるような余裕はない。

ただ前だけを見据え、ついにそこへとたどり着く。王族以外は入りが禁じられていたはずの場所は、今や守る者もおらずに打ち捨てられていた

飾り文字で、そこには『魔法炉^{まほうろ}』と記されている。この部屋こそが、王都全体に魔力を供給する元であり、城の最深部でもあった。

必ず、ここへ戻ると誓った。しかし、その誓いが果たされる時を目の前にして、エルヴィーラは立ち止まってしまう。

「ここで帰ってちょうだい」

「何を言うか。ここまで我は付き合わされたのだ。最後まで見届け

なければならぬ」

「願った人間がもういいと言っているのよ」

「魔法使い、我は龍だ。龍は願う前に叶える。そして我は貴様を最後まで見届けたいと思った。我の願いは必ず叶えてみせる」

彼はそう言っただけでも自分の我儘を叶えてきた。しかし、今度こそは彼はその願いを後悔するだろうとエルヴィーラは確信していた。はつきりと、リユーを見据えて最後の忠告をする。

「あなたがこれからあれを見てまだそう思えるのだったら、そうすればいいわ」

重い扉は鈍い音を立てて開け放たれる。すると中から青白い光が漏れ出て、二人の顔をぼんやりと照らし出す。

部屋に満ちていたのは冷涼さと、静寂だった。その中心に向かってエルヴィーラが歩を進めると、徐々にそれが姿を現す。

曇り一つなく磨かれたと思われる床は、実際は明度の高い水面だった。部屋の大部分を占めるその水面の底に、光の元がある。

水底に眠るのは、青い鱗の龍だった。

「私が流刑に処されたのは、これを見てしまったから。この国の秘密に気がついてしまったから」

その秘密を、エルヴィーラはすぐには口にできない。躊躇うように何度か口を空回らせて、やがて意を決したようにそれを告げる。

「この国は、一匹の竜を犠牲にして繁栄してきたのよ。王都中で魔法が使えたのも、この龍から力を吸い取り続けてきたから」

龍の鱗は、リユーやシエラのもののように燦然とは輝いてなどいなかった。鈍く光を照り返すそれは、見る者に悲しみを与えるに十分だった。

エルヴィーラはそれに同調する。龍の代弁者として、真実を同族に伝える苦しみをまるごと引き受ける。

「でも、一年前から力の供給が不安定になってきたの。その調査のために私たちが三カ月前に派遣されて、そして私は出会った」

その時のことを思い返すと、エルヴィーラの胸に痛みが走る。鋭

くて、重く、そして冷たいその叫びを、エルヴィーラは音に乗せる。
「私は、確かに聞いたの。この龍が『さみしい』って言ったのを。
必死に訴えたわ。もう、この龍は限界だと。でも、上はそれを聞き
入れるどころか、私を国家の安全を脅かす反逆者だと決めつけて勾
留した拳句、弁解の機会も与えられないまま濡れ衣をきせられて流
刑にされた」

「やはり、復讐というのは嘘だったのだな」

「言えるわけがないでしょう？ あなたの同族を害しに行くなんて
エルヴィーラが彼に嘘をついた理由。それをやっとなげることが
できて密かに安堵している。その事実にあるヴィーラは驚いていた。
エルヴィーラは、彼に嫌われたくないと思っている。けれども、
嘘をつきたくないとも思っていた。

こんな感情を誰かに、しかも龍に持つことになるなど、以前のエ
ルヴィーラには予想もつかなかった。

もつと、他の出会い方をしていれば、別な未来もあったのかもしれないのに。

「なにが永久の繁栄よ。なにが魔法使いよ。たった一匹の龍さえ救
えないくせに」

エルヴィーラの声には嘲りの色が濃い。それは龍から力を吸い取
り続けてきた人々、それを許した者たち、そして守りきることがで
きなかった自分自身へと向けられていた。

「だから壊すの。全部、私が、ここで」

「故郷を、愛しているからか」

エルヴィーラの漆黒の双眸が大きく見開かれる。驚きと、戸惑い
を浮かべて。

反論の声が響き渡る。

「愛してなどいないわ！ 私は、私は……ただ、魔法使いとして」
「守りに来たのだろう？ この都を、自分が育った地を。もし以前
のような繁栄は望めなくても、生きていれば何度でもやり直すこと
はできる」

この龍は、いつもそうだ。

どんなに隠し通そうとしても、なかったことにしようとしても、一つ一つを暴いて、エルヴィーラが捨てたものを拾い上げてくれる。戻りたかった。

もう一度、認めてほしかった。

帰ってきてもいいと、許されたかった。

「魔法使いは自分自身で考えているよりもずっと優しくて、臆病で、寂しがり屋だ」

いつものように笑って見せる。それだけで、ひどく心が軽くなるのをエルヴィーラは確かに感じた。

「もし、もしも本当にそうだったら、だからこそ、私たちは引かれあつたのかもしれない。誰かの役に立ちたくて、頑張つて、でも報われなくて。それでも、傷ついても」

「そうだな、魔法使いは私の妹によく似ている。ここに眠る私の唯一の妹に」

「やっぱ、そうだったのね」

一つの予感が確信に変わる。それに驚いたのはむしろリユーの方だった。

「エステルリーゼを知っているのか」

「シエラが教えてくれたの。リユーは、いなくなった妹を探しているって。あなたの妹がいなくなったのは、約百年前。そしてこの国の建国も約百年前。簡単な一致よ」

それでも、リユーはただ困つたように苦笑を浮かべるだけだ。

許しを請う前から、彼はエルヴィーラを、この国の民を許してしまっている。

そんな彼の前で、不誠実であることが耐えられなかった。だからこそ、今からできることを、最善を尽くすために、エルヴィーラは拳に力を込める。

「これから、あなたの妹さんの眠りを覚ますわ。封じ込められていることで力が淀んでしまっているから。あなたは、声をかけ続けて

「ちょうだい」

静かに頷き、リユーはそつと水面の底の妹へと語りかける。

「エステルリーゼ。聞えているか、我が妹よ」

しかし、固く閉じられたままの瞳はぴくりとも動かない。そのことにリユーは悲しみを隠せない。

「もう、我の声すら届かぬのだな」

いつも彼は無邪気だった。まるで、悲しみなど知らぬかのように。しかし、彼は今確かに悲しんでいた。

広い背中にそつとエルヴィーラは寄り添い、それだけでは足りずに抱きしめると、リユーはまるですがるように細い手を握り返す。

ここで、終わりにしなければいけない。

そう二人が言葉もなく、しかし同時に決意した時、三人目の声が響き渡る。

「やっぱりここにいたんだね」

現れたのは、まだエルヴィーラに殴られた跡が痛々しいトルドだ。しかし、その瞳は痛みなど最早解さないほど爛々と狂気に輝き、エルヴィーラと寄り添う龍に向けられる。

「君が僕のものにならないなら、誰のものにもならないなんて保証はない。そんなままで僕は生きていけない。だから、死んで」

エルヴィーラを後ろに庇い、リユーが攻撃をしようとにわかに手へ魔力を集め始める。

「邪魔はしてくるな、人間の屑よ。我は貴様を塵芥に返すほど虐げたくはない」

しかし、トルドが駆けだしたのは全くの見当違い、龍の寢床だった。瞬時に彼の目的を悟ったエルヴィーラは、制止の声をあげる。

「トルド、だめ！」

しかし、もうエルヴィーラの叫びは彼を繋ぎとめることはできない。

壊れた男の瞳が映すのは、ただ龍のみ。

「龍よ、願いが欲しいんだろう。だったら、僕が願ってやろう」

「やめて！ それだけは言うてはだめ！」

「対価は僕の命だ。王都を、彼女ごと滅ぼせ」

今まで、身じろぎすらしなかったエスタルリーゼの体が、わずかに震える。

一つの波紋が、やがて波となり、凪いだ水面が荒れはじめる。

彼女は、目覚めてしまったのだ。

「さようなら、エル。でも、寂しくなどないよ。きっと僕たちはまた天上で会える。その時はきっと僕のために」

最後まで言いきることなく、トルドは血を吐き出し、水底へと吸い込まれるかのように体を傾がせる。エルヴィーラは彼を捕らえようと手を伸ばすが、結ばれることはない。水音に続いて、力を失った体は血で水を濁らせ、ゆるゆると沈んでいく。

最後に彼は笑っていた。本当に、エルヴィーラと再会できると信じ切っていたその表情が、瞼の裏に焼きついて離れない。

「逃げるぞ、魔法使い」

立ちつくしていたエルヴィーラを、リユーは揺さぶる。そうして彼の赤い瞳がエルヴィーラを覗き込むようにして捉えれば、心が奮い立つ。

嘆くのは、生きていればいつでもできる。けれども、死んでしまったらもうそこで終わりなのだ。

荒れた水に共鳴し、部屋の中に何かが呼応するような音が響き渡る。心臓の鼓動にも似たそれが空気を震わせ、水底から強い光が溢れ出てくる。

間一髪で一人と一匹が手を取り合い魔法炉から抜け出したその瞬間、それは吼えた。

それは、さながら青い嵐だった。

城を中心として王都に広がる咆哮、そして衝撃波に、住民は何事かとみな外に出てくる。

城の上には、一匹の龍がその両翼を見せつけるように体を広げ、

夜空に向かって青い焰を吐き出した。

しかし、それはただの始まりに過ぎない。

漆黒の闇の中で輝く炎と同じ色の瞳は、眼前に広がる街を捉える。龍だ。

一人が口にすると、そこから段々と波紋のように混乱は広がっていく。

なぜ、おとぎ話の中でしか語られない存在がここに現れたのか。どうして、敵意を宿した双眸で、この都を見つめているのか。

人々が答えを得るよりも早く、龍は急降下をし、炎を躊躇いもなく地上に向かって吐き出す。

火の手はあつという間に広がり、王都中が恐慌状態に陥るまでそう長くはもたなかった。

青白いその姿が、縦横無尽に空を駆けまわり、夜闇に不気味に映える。一刻も早く、その暴威から遠ざかろうと、王都の人々は城壁に雪崩のように押し寄せる。

「早く！ ここから出して！」

「家はダメだ！ 戻ったら終わりだぞ！」

「押さないで！ 病人がいるの！」

城壁の堅固な守りが仇となり、流れは滞っている。

誰もが、出口という一点を目指し、駆け、押しのけ、怒号を上げる。

しかし、その流れに逆らう姿があった。

エルヴィーラだ。

リユーとはこの騒ぎの中ではぐれてしまった。しかし、彼がおらずとも、エルヴィーラは行かねばならなかった。

逃げまどう人は、エルヴィーラに一瞥もくれず過ぎ去っていく。やがて誰ともすれ違うことがなくなり、ただ眼前には燃える王都が広がっていた。

「全部、燃えてしまうのね」

廃材で作った孤児時代のあばら家、魔術の学び舎、登城するために

毎日通った道の居並ぶ店々、祭のあった大通り、おそらくそれら全てが今灰に還ろうとしている。

「私が、止める」

ぎゅっと、手にはめている指輪を握る。これだけは外されなかった。自分を捕えていた牢獄の監視に感謝しなければいけない。

非常時のみの、この指輪の使用法。この国の魔法使いがはめている指輪は杖の代わりに魔力を込められるのだ。

エルヴィーラが一つ深呼吸をして唱えたのは、彼女が知る中で最高の攻撃の魔法、破滅の呪文だった。

最後の力だった。これで終わらなければ全てが終わる。

お願い、どうか。

願いを込めて呪文を詠唱したのも、何かの為に魔法を放ったのも、これが初めてだった。

龍に向かって突き出された指輪から、一つの輪が浮かびあがる。

最初は小さかったそれが、段々と広がっていき、龍の真下へとその位置を定める。

その瞬間、ただの円の中に複雑な文様が刻まれていく。いくつもの意匠と、緻密な文字列の組み合わせが浮かびあがっては、龍の体へとまるで生き物のようにまとわりついていく。そうして全ての文様が龍の体に刻まれたところで、魔法使いは「滅」と引き金となる言葉を紡いだ。

爆発が、夜空に刹那の明かりをもたらす。恐慌状態に陥っていた人々も、その光に一瞬釘付けとなる。

エルヴィーラは、息もすることもできずに待つ。しかし、漆黒の瞳に映ったのは残酷な現実だった。

爆煙の中から現れた青い龍は、鱗一つ損なうことなく、エルヴィーラの前に漂っている。

杖も持たない一魔法使いごときの攻撃では、龍の鱗に傷を与えることもできなかった。

できることは、全て成し遂げた。もう、ここに残っているのは、

何もかも出しつくしたただの残滓。

龍の喉元にある一際輝きを放つ鱗が、光の球を増幅させている。おそらく、それは自分に向けられたものだ。エルヴィーラは悟る。目をつむり、四肢を投げ出す。それでもなお、瞼を透過するほど激しい光が迫っている。

ああ、これで最後なのね。

しかし、その時はやってこない。

代わりに降ってきたのは、彼の声。

「大丈夫か、魔法使い」

「リユ」……………」

いつの間にか本来の龍の姿に戻っていたが、その燃えるような赤い鱗は見間違はずもなかった。そうして、自分を捉える凧いだ。穏やかな瞳も、いつも彼がくれたもの。

目を閉じてしまっていたため、何が起こったかは分からない。しかし彼がおそらく庇ってくれたのだろう。鱗が所々焦げてしまっていた。

「怪我をしているわ！」

「これくらいかすり傷だ。だから、そんな泣きそうな顔をしてくれるな。それよりも、魔法を使って王都まで来なかったのはさっきの魔法の為だったのだな」

攻撃の魔法を唱えているところを見られてしまった。救えないのなら、息の根を止める。無力ゆえに選ばざるを得ないその選択を、エルヴィーラはこの龍に知られたくはなかった。

罪悪感が、エルヴィーラに語ることを許さない。どんな言い訳や許しの懇願も、魔法使いは自分に許せるはずがなかった。

「また一人でなんでも片付けようとしたのだな。魔法使いはいつもそうだ。何も言わずに一人で歩いて行ってしまう」

「一人で頑張るのは、これが最後よ」

まだ一つ、最後の賭けが残っていた。これを果たしてから、その時を迎えるのも悪くはないだろう。

「リユー、最後のお願いよ。あの龍を鎮めて」

この期に及んで、まさか願いを告げられるとは思わなかったのだろつ。リユーはしばらく黙りこんだ後、短く問う。

「対価は」

エルヴィーラは笑った。その笑顔が、リユーを戦慄させる。

「私の命を」

「やめろ、魔法使い！」

「命を差し出すから、お願い。王都を守って」

逡巡の間にも、青い龍の暴走は止まらない。むしろ激しさを増しながら、王都の建物を破壊していく。

「ひどい願いだってわかってる。私が願えるようなものでないということも。だから、私の命で償うから、お願い」

一度、青い龍が高く啼く。激しい衝撃波が巻き起こり、砂埃を上げる。

それでもエルヴィーラは揺るがない。あの砂漠で見せた瞳の輝きも、力強さも、失われてなどいない。

諦めるかと、まるで世界に挑むような光。

最初からリユーを惹きつけてやまないその光に、彼が再び抗えるはずもなかった。

「わかった。その願い、確かに聞きつけた」

そうして、エルヴィーラを背に庇い、再びその青白い破壊者に向き直る。

「命じる。我はその通りに成し遂げる」

「龍の鱗をはぎ取り、その爪を奪い、牙を引き抜いて」

翼の一羽ばたきで、放たれた弓矢のようにリユーは青い光へと突っ込んでいく。

炎に照らし出された赤い鱗は、まるで燃え上っているかのように陽炎の中で揺らめく。そうして、青い龍にあつという間に忍び寄り、その爪は確かに喉もとの強く光るその一片―逆鱗を捕らえた。

龍の急所とも言える部分を傷つけられ、青い龍は空中で激しくの

たうちまわる。それに追い打ちをかけるかのように、リユーは腹に噛みつく。

勝負は圧倒的だった。このまま彼が青い龍を屠り続けたならば。しかし、リユーは突き立てたはずの牙を放してしまう。そこから血が吹き出るが、帰り血を浴びたままとどめを一向に刺そうとしない。更には、先ほどまであれほど光り輝いていた赤い逆鱗が、今やすっかりその輝きを失っている。

ふらふらと、力なくリユーはエルヴィーラの元へと降りたつ。そして、低く、低く、その言葉は響いた。

「駄目だ、我には、エスタルリーゼを殺すことができない。なぜ。龍は願わない。願う前に、叶えてしまふ。しかし、我は今、願っている。我が叶える代わりに、いずれかがその願いを叶えることを」
龍は迷わない。龍は悲しまない。龍は願わない。

しかし、今それが真つ向から否定されようとしている。

リユーは迷っている。リユーは悲しんでいる。リユーは願っている。

「リユー、あなたは何を願うの」

エルヴィーラは、その赤い瞳を真つ直ぐに捉えて問う。彼の、答えを受け止める為に。

真紅の色が、揺れている。逃げるように逸らされる。しかし、彼は告げる。その願いを。

「エスタルリーゼを、殺してくれ」

「あなたはその願いを、誰に願うの」

かつて彼が訊いたように、エルヴィーラも問う。

「エルヴィーラよ。我の、リユダルド・リウドヴィク・リウシウス・リユヴァンダルの願いを叶えてくれ。我が妹エスタルリーゼを解き放ってやってほしい。それが、我の願いだ」

願いは、言葉となり確かにエルヴィーラへと届いた。あとは、彼女の答えを待つだけだ。

一つ、深呼吸をする。震えは、押さえた。あれこれと浮かんでく

る不安も全てかき消す。

彼は名前を差しだした。命にも等しいはずの大切なものを。エルヴィーラと同じように、彼もまた選んだのだ。

魔法使いは一息に告げる。

「分かったわ、龍殺しの咎は私が負う。呪文を紡ぐのも、力を解き放つのも、あの体を引き裂くのもすべて私が成し遂げる。だから、あなたの魔力を私にちょうだい」

かくして、願いは叶うために巡りだす。

あれほど空っぽだと感じた体に、力が満ちてくる。奥底からわき上がるそれが龍の力ならば、彼らが願いを叶えるのがわけないという理由を真に理解できたような気がした。

「風よ」

その一言だけで、竜巻のような渦が幾筋もエスタルリーゼを襲う。天に向かつて吠えたとそれは弾かれてしまいが、負けじとエルヴィーラも呪文を紡ぐ。

「古の種のその末まで、残らず絡み戒めろ」

すると一斉に地面から大小様々な樹木が生え、白い龍の体をからめ捕る。それはやがて一本の巨大な木のようにそびえ立ち、中心に龍を据えてしまった。

動きは止まったようだ。

しかし、想像以上に体に無理が来たらしく、膝が自分のものではないかのようにみつともなく震える。

しかし、傾ぎそうな体を支える腕があった。

人の形に姿を変えたリユーだった。

「大丈夫だ。前だけをみているがいい。魔法使いの背中是我が支える」

預けてしまった背中から力が満ちてくるのが分かる。

暗く濁っていたエスタルリーゼの瞳が、不意に澄んだ色調を取り戻す。

それは、確かにエルヴィーラとその後ろのリユーを捉えていた。

お願い。

早く、殺して。

私の愛した場所を壊してしまう前に。

流れ込んでくる思いを、言葉を、確かにエルヴィーラは聞いた。

あとはもう、解き放つだけだ。

「かのものを、滅せ」

幾筋もの光の矢が、いましめられた龍に最後のとどめを刺す。最早身じろぎ一つできなくなってしまったその体は急速に黒ずんだかと思うと、一瞬にしてまるで昼間であるかのごとく光を放つ。

「龍の、臨終の時だ」

樹がまるで時を早めたかのように枯れていく。青い龍―エステルリーゼは、ゆるゆるとリユー達の方に近づいてくる。

しかし、先ほどの暴れていた姿を目にしたというのに、エルヴィーラもリユーも警戒心は起こらなかった。むしろ、自分たちも自然とその弱りきった体を支えようとするかのように手を伸ばす。

『お兄様、さようなら。悲しいこともあったけど、エルはとても幸せでした』

その声は、満ち足りたもので、とても先ほどまで暴れていた龍のものとは思えなかった。

しかし、それこそが彼女の本質だったのだ。穏やかな風のように優しく、澄んでいる。

体が、砂のように崩れていく。それは漆黒の空の中でひときわ明るく光を放ち、舞い散っていく。

「龍は死ねば光の粒になる。そして、風に溶けていつかまたこの世に生まれ出でる」

その光の粒を一片たりとも見逃すものか。リユーの真摯な瞳はそう物語っているように見えた。

「また会おう、エル。いつの日か」

そのいつの日が一体どれほど先のことになるのか、ただ側に寄り添うことしかできないエルヴィーラには見当もつかないことだった。

対価

そうして、龍はいなくなつた。

その後、王族は都に戻つて来たようだったが、真つ先に逃げ出したと言ふ事実が広まるのをとどめることはできなかったようだ。

その不満をそらすために彼らが真つ先にしたのはエルヴィーラの指名手配だった。

エルヴィーラの首に掛けられた賞金は莫大な金額で、生死は問わないとされている。

あくまで龍が暴走したのはエルヴィーラの仕業、そうやって責任逃れをするつもりなのは明白だった。

しかし、それも今となつては瑣末なことだ。

なにせ、彼女はその命を龍に捧げてしまっている。

「さあ、こんなにもいい天気の日に逝けるなんて私は幸せだわ」

王都から外れた森。そこがエルヴィーラの潜伏地だった。エスタルリーゼの最後の時を見届けた後、一人と一匹は混乱に乗じて王都から抜け出した。

「貴様は愚かだ、魔法使い。なぜ、命を差し出す代わりにその指輪を差しださなかった」

あの時は必死だったため、そのことには気がつかなかった。だが、エルヴィーラは首を横に振る。

「どうせ、私が龍殺しをしなければいけなかったもの。そうすれば、私は今度こそ死罪になって、死ぬ。だから、どうせ死ぬのなら魔法使いとして、生をまっとうしたかった。それが、私の存在意義だったから」

「我に、殺してほしいのか」

「もう、帰るところがないわ」

震える声で、エルヴィーラは言った。目尻から雫がこぼれ落ちないように、天を仰ぎながら。

「どうせ生きながらえても、もう帰るところがない。どこにも、帰れない。最初から、帰る場所なんてなかったのに」

あれだけぼろぼろになりながら守った故郷は、エルヴィーラを受け入れてはくれない。

リユーの願いを聞き入れる時に覚悟は決めたはずだった。しかし、いざその事実を突きつけられたエルヴィーラには、もうこれ以上なにも生きる目的などなかった。

今更ながらに気がつく。

疎まれても、暗い想いでばかりでも、確かに自分は故郷を愛していたのだと。

だから、最期の時を待つ。きっとそれはこの龍が与えてくれる。

しかし、龍が与えたのは痛みでも苦しみでもなく、女の額への口付けだった。

「どうして」

「我は魔法使いの命を手に入れた。だから、それをどうしようが我の自由だ。生かすも殺すもな」

そうして、いつもの悪戯っぽい笑みを浮かべエルヴィーラを捉える。しかし、それは彼女に動揺しかもたらさない。

「どういってもりなの」

「深い意味はない。気にするな」

飄々とした調子でかわそうとするが、エルヴィーラは龍を逃さない。

「私は、あなたの妹さんを殺したのよ？ 私、人が憎くはないの？」

「エルが死んだことは、確かに悲しい。だが、あんなったのも、全て始まりに人と共にいたいという願いをエルが願ったからだ。我と同じように」

なんと愚かな龍たちだろう。

しかし、その愚かさを愛おしいと認めるしかないことも、魔法使いは気づいている。

「龍が願わないなど嘘だ。たった一匹では、誰かを思うことすら敵わない。そんな、簡単なことを、我々は願う。そして、願いを叶えるために、人間達と交わりたいと思うのだ。それではだめか」

それは、おそらく龍と人との新しい関係だ。ただ、対価を引き換えとして願うのではなく、お互いに思いあい、願いあい、叶えあう。

上目づかいの伺うような様は、龍ではなくただの一人の男のものだった。

「リユー、あなたも願うの？ 誰かに、思われることを」

「ああ、それが我の願いだ」

なんと些細な願いだろう。

しかし、それを叶えることは奇跡のようなことで、決して簡単ではないと孤独を知るエルヴィーラは理解している。

それでも、もう誰かの手を取ることを彼女は恐れなかった。この龍が相手なら尚更だ。

「叶えてあげるわ、あなたの願い。あなたが焦がれてやまないその未来を」

空と同じ、どこまでも澄んだ笑みをたたえて、エルヴィーラは龍に誓う。

龍はこい願い、魔法使いはそれを叶えた。

叶えた願いのその先に何が待っているのか、それは一人と一匹だけが知っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0205z/>

龍が、こい願えば。

2011年12月2日19時57分発行